



神の命令によってケリテ川のほとりに住まい、川の水と鳥の運ぶパンと肉によって養われた預言者エリヤ。しかし、その地も雨が降らず、川も枯れてしまいました。そんな時に彼に新たな導きが与えられるのです。

1. やもめとの出会い (8～11節)

- ① 預言者の働き (8) 「すると、彼に次のような主のことばがあった。」エリヤがアハブ王(紀元前874～)の時代に活躍した預言者であることはお伝えしました。また預言者の役割は、神から御言葉を預かりそれを語ることにあったことも学びました。今朝の聖書箇所は、まさに主がエリヤに御言葉を与えられ、促がされたということが記されています。
- ② ツアレファテに住め (9) 「さあ、シドンのツアレファテに行き、そこに住め。見よ。わたしは、そのひとりのやもめに命じて、あなたを養うようにしている。」主のご命令は、シドンのツアレファテに行って住めというものでした。裏のページの地図をご覧ください。地中海沿いでの北の方にシドンがあり、それよりやや南にツアレファテがありますね。彼が今いるのは、ケリテ川のほとりです。その川はエルサレムに近い所流れ、ヨルダン川より東側にもつながっていました。ツアレファテまで直線距離は160キロほどです。そこに、一人のやもめがいるというのです。そして、その女性を用いて、エリヤを養うという約束も与えられました。
- ③ ひとりのやもめ (10～11) 「彼はツアレファテへ出て行った。その町の門に着くと、ちょうどそこに、たきぎを拾い集めているひとりのやもめがいた。そこで、彼は彼女に声をかけて言った。『水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。』彼女が取りに行こうとすると、彼は彼女を呼んで言った。『一口のパンも持って来て下さい。』」エリヤ主のご命令に従い、ツアレファテに行きました。その町の入口であり、広場となっている所で、一人の女性に会いました。彼女がやもめであったことは、その地味な服装、髪型などでわかりました。エリヤは彼女こそ主が言われた女性かもしれないと思い、声を掛けました。内容は直接的です。「水差しにほんの少しの水を持って来て、飲ませてください。」そして、エリヤは素直に水を取りに行こうとする女性に、何の遠慮もなくさらに要求したのです。「それから、一口のパンも持って来てください。」。主が備えられた人であれば、それは聞き入れられると信じたのです。

2. 恐れてはいけません (12～14節)

- ① 一握りの粉と油 (12) 「彼女は答えた。『あなたの神、主は生きておられます。私は焼いたパンを持っておりません。ただ、かめの中に一

握りの粉と、つぼにほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本のたきぎを集め、帰って行って、私と私の息子のためにそれを調理し、それを食べて、死のうとしていたのです。』彼女は答えます。冒頭の言葉は興味深いです。「あなたの神、主は生きておられます」。生きているというのは、自分にご関心を持ち、必要を満たしてくださいという期待が込められているでしょう。しかし、実状は所望された焼いたパンがなく、かめの中に一握りの粉と、壺の中に少しの油があるだけだということです。そして、彼女は言いました。集めているたきぎを持ち帰って燃料として調理して食べたなら、あとは死を待つばかりであると。

②パン菓子を作り (13)「エリヤは彼女に答えて言った。『恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず、私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。それから後に、あなたとあなたの子どものために作りなさい。』」エリヤは慰め、励ますようにして言いました。「恐れてはいけません。」と言ったのですが、その意味は現状を憂えて、将来に悲嘆しないようにしなさいということでしょうか。そして、エリヤは彼女に、パンを作ることはその通りにするとして、その前に私（エリヤ）のために、小さなパン菓子を作って持ってくる事。その上で彼女と息子のパンを作りなさいと伝えました。

③主が雨を降らせる日まで (14)「イスラエルの神、主が、こう仰せられるからです。『主が地の上に雨を降らせる日までは、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくなる。』」エリヤが無理難題と思われる要求をする理由は、イスラエルの神、主が、雨を降らせるまでの間は、やもめ親子の家のかめに入っている粉と、壺の油は尽きることがない、と約束してくださっている確証があるからだということです。

3. かめの粉も壺の油も (15~16 節)

①ことばのとおり (15)「彼女は行って、エリヤのことばのとおりにした。」エリヤの言ったことを信じるかどうかは、やもめの信仰次第です。人間的に考えるならば、理不尽な要求でしたが、彼女はこれを受け入れました。そして、エリヤの命じたように、まずはエリヤのためにパン菓子を作って、それを提供しました。それから、残ったわずかな粉と油で自分たちの分も作ったのです。親子の分は小さなパンだったことでしょう。

②長い間それを食べ (15)「彼女と彼、および彼女の家族も、長い間それを食べた。」しかし、その結果は恵みに富んだものでした。主の言われる通りでした。やもめと子供はずっと食べ続けることができました。また、そこに身を寄せたエリヤも食事を長い間、パンを口にすることができました。

③かめの粉は尽きず (16)「エリヤを通して言われた主のことばのとおり、

かめの粉は尽きず、つぼの油はなくならなかった。」こうして、エリヤを通して、主から与えられた預言は、実現したのです。やもめ家族のかめの粉はずっと満たされ、パンを作る時に必要な油もずっとなくなることはなかったのです。

《結論》今朝の聖書箇所から三つのことを学んでいきたいと思えます。

第一に、預言者エリヤの信仰です。彼はケリテ川のほとりに住んだのは、主の促しがあったからです。彼はそれに従いました。そして、今回も主のご命令がありました。今回は地中海沿いのツアレファテという遠い町に行けという内容です。雨が降らず、水にも食糧にも事欠く状況にあって、「そこにいるやもめが、あなたを養う」という約束も与えられました。彼はそれを信じ、そちらに向かったのです。主からの使命と受け取ったからでありましょう。主の御言葉を堅く信じ、疑わなかったのです。ここに彼の信仰を働きの基本方針を見ることが出来ます。つまり、人間的に考えるのではなく、神を第一にし、その御言葉を重視するあり方でした。人間的に考えるならば、ツアレファテに行っても、やもめに出会えるかわからない。また、やもめがどんな女性かもわかりません。出会えたとしても、自分を養ってくれるかどうかの保証はありません。しかし、彼は主の御言葉を信じて、出かけたのです。アブラハムから受け継がれていた信仰です。私たちも御言葉をいただいた時に、それを信じて従い、実行していく信仰をいただいでいきたいものです。

第二にこのやもめに与えられた信仰です。彼女は出会うなりエリヤから、水とパンを所望されたのです。藪から棒に何を言っているのだと思える言葉でしたが、彼女は「あなたの神、主は生きておられます」と述べています。立派な信仰告白です。そして、わずかだけ残る粉と油でパン菓子を作って、まずエリヤに、差し出しなさいという、理にかなわないと思われる要望がだされたのです。その時に、やもめは命がけで信じました。つまり、その粉と油は、自分と息子が食べる分ほどしかないのです。しかし、その大切なものを、彼女は主にささげるとつもりで、言われる通りに、エリヤにまずパン菓子を作って提供したの

です。自分達が食べる分は減っても、エリヤを通して語られたのは主の言葉と信じて、彼女はそれを実行したのです。ここに彼女の全存在をかけた信仰をみることができます。私たちの信仰には、命がかかっているでしょうか。

第三に、主の備えについてです。エリヤに御言葉を与えられたのは主です。人間的には無理難題とも思えます。エリヤに出された「行け」というご命令も、やもめに与えられた「差し出せ」という促しも難しい内容です。しかし、主は予め、人間の考えを越えて備えていてくださったのです。食糧が尽きることで、死ぬしかないと思っていたやもめの家の粉と油は、エリヤにさし出された後の、長い間、粉も油も無くなることはなかったのです。やもめと少年はもちろん、エリヤもそこで作られたパンを食べることにより、肉体の命をつなぐことができます。これはエリヤとやもめの信仰より先んじて、主なる神の恵みがあったからです。主は予め備えられていたのです。エリヤとやもめは、主の御言葉通りにして、その恵みにあずかったのです。「わたしを呼べ。そうすればわたしはあなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなることをあなたに告げよう」(エレミヤ 33: 3)。私たちの人生には、私たちには理解できないことも起きてきます。しかし、何があっても主の恵みによる備えを信じていきたいのです。主の備えは私たちの考えを越えていくのですから。栄光在主。